5/15 Thu.

第682回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 682 / Suntory Hall 19:00

5/17 Sat.

第141回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール　14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 141 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Honorary Guest Conductor
尾高忠明（名誉客演指揮者）*–p.5*
TADAAKI OTAKA

チェロ
Cello
ラファエラ・グロメス *–p.7*
RAPHAELA GROMES

第1コンサートマスター
First Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ドヴォルザーク
DVOŘÁK
チェロ協奏曲 ロ短調 作品104［約40分］*–p.9*
Cello Concerto in B minor, op. 104
I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Allegro moderato

［休憩］
[Intermission]

エルガー
ELGAR
創作主題による変奏曲〈エニグマ〉［約31分］*–p.10*
Variations on an original theme "Enigma", op. 36

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協賛：大成建設株式会社（5/15）
協力：横浜みなとみらいホール（5/17）

5/27 Tue.

第648回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 648 / Suntory Hall 19:00

指揮
Honorary Guest Conductor
尾高忠明（名誉客演指揮者）*–p.5*
TADAAKI OTAKA

コンサートマスター
Guest Concertmaster
白井 圭（ゲスト）
KEI SHIRAI

尾高尚忠
HISATADA OTAKA
交響的幻想曲〈草原〉［約15分］*–p.13*
Eine symphonische Phantasie "Steppe" op. 19

［休憩］
[Intermission]

ブルックナー
BRUCKNER
交響曲 第9番 ニ短調 WAB109（コールス校訂版）［約63分］*–p.14*
Symphony No. 9 in D minor, WAB109 (Cohrs edition)
I. Feierlich, misterioso
II. Scherzo. Bewegt, lebhaft
III. Adagio. Langsam, feierlich

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

5/31 Sat.

第277回 土曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 277 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

6/1 Sun.

第277回 日曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 277 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮 Conductor
川瀬賢太郎 *–p.6*
KENTARO KAWASE

ピアノ Piano
阪田知樹 *–p.7*
TOMOKI SAKATA

第1コンサートマスター First Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ガーシュイン GERSHWIN
パリのアメリカ人 ［約16分］ *–p.16*
An American in Paris

ラヴェル RAVEL
左手のためのピアノ協奏曲 ニ長調 ［約19分］ *–p.17*
Piano Concerto in D major for the Left Hand

［休憩］ [Intermission]

ドヴォルザーク DVOŘÁK
交響曲 第9番 ホ短調 作品95 **〈新世界から〉** ［約40分］ *–p.18*
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮
尾高忠明
（名誉客演指揮者）
TADAAKI OTAKA, Honorary Guest Conductor

壮大なスケールで奏でる〈エニグマ〉&ブルックナー

©Martin Richardson

名匠・尾高忠明が得意とする英国音楽からエルガー作品や、父・尚忠が作曲した〈草原〉、そしてブルックナーの交響曲第9番を取り上げ、熟達したタクトで引き締まったサウンドを引き出す。

1947年生まれ。桐朋学園大学、ウィーン国立アカデミーで学んだ後、東京フィル常任指揮者（74〜91年／現・桂冠指揮者）に就任。BBCウェールズ響首席指揮者（87〜95年／現・桂冠指揮者）を務め、多くの英国音楽を指揮した。

読響では92〜98年に第6代常任指揮者を務め、現在は名誉客演指揮者の地位にある。札幌響音楽監督（2004〜15年／現・名誉音楽監督）、メルボルン響首席客演指揮者（10〜12年）、新国立劇場オペラ芸術監督（10〜14年）を歴任。現在は大阪フィル音楽監督、N響正指揮者、紀尾井ホール室内管桂冠名誉指揮者。21年から「東京国際指揮者コンクール」審査委員長を務めている。国内の主要楽団のほか、世界各地の楽団に客演。大英勲章CBEを受章し、英国エルガー協会から日本人初のエルガー・メダルなどを授与される。サントリー音楽賞、有馬賞（N響）、北海道文化賞、関西音楽クリティック・クラブ賞本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、JXTG音楽賞洋楽部門本賞など受賞多数。21年秋には、旭日小綬章を受章し、今年2月には日本芸術院会員に選出された。後進の指導にも力を入れ、東京芸術大学名誉教授、相愛大学および京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授、桐朋学園大学特命教授を務めている。

5/31 土曜マチネー
6/1 日曜マチネー
Maestro

指揮

川瀬賢太郎

KENTARO KAWASE, Conductor

注目の気鋭指揮者 川瀬が振る華麗なる〈新世界〉

©Tomoko Hidaki

躍進を続ける気鋭・川瀬賢太郎が読響のシリーズ公演に登場。ドヴォルザークの〈新世界〉などを指揮し、躍動的なリズムを引き出す。

1984年東京生まれ。東京音楽大学音楽学部音楽学科作曲指揮専攻（指揮）を卒業。指揮を広上淳一、汐澤安彦、チョン・ミョンフンに師事。2006年に行われた第14回東京国際音楽コンクール<指揮>において第2位（最高位）に入賞。その後、東京響、名古屋フィルなどと共演。国外でもイル・ド・フランス国立管やルクセンブルクのユナイテッド・インストゥルメンツ・オヴ・ルシリンに客演し、成功を収める。11年4月から名古屋フィルの指揮者を務め、23年4月には第6代音楽監督に就任。意欲的な選曲と若さ溢（あふ）れる指揮で聴衆を魅了している。14年4月から22年3月まで神奈川フィルの常任指揮者を務めた。近年は細川俊夫〈班女〉〈リアの物語〉、モーツァルト〈後宮からの逃走〉〈フィガロの結婚〉〈魔笛〉、ヴェルディ〈アイーダ〉などオペラの指揮でも、目覚ましい活躍を遂げている。

これまでに渡邉曉雄音楽基金音楽賞、神奈川文化賞未来賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、出光音楽賞、横浜文化賞文化・芸術奨励賞など受賞多数。現在は、札幌響正指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢パーマネント・コンダクター、東京音楽大学作曲指揮専攻（指揮）特任講師、三重県いなべ市親善大使。読響とは2008年以降、多数共演している。

5/15 名曲
5/17 横浜マチネー
Artist

©wildundleise.de

チェロ

ラファエラ・グロメス

RAPHAELA GROMES, Cello

幅広いレパートリーを誇り、欧州で頭角を現すドイツの新星チェリスト。ミュンヘン生まれ。ライプツィヒ、ミュンヘン、ウィーンの各音大で学ぶ。2005年にグルダのチェロ協奏曲でソロ・デビューし、注目を浴びる。ナガノ、ラクリン、ポッペン、インキネンらの指揮でケルン・ギュルツェニヒ管、ハンブルクNDRエルプ・フィル、フランクフルト放送（hr）響、ベルリン・ドイツ響、プラハ響などと共演。ソニー・クラシカルと専属契約を結び、8枚のCDをリリース。新たなレパートリーを開拓して高い評価を受け、オーパス・クラシック賞、ディアパソン・ドール、ドイツレコード批評家賞など受賞多数。今年はシュヴェツィンゲン音楽祭でアーティスト・イン・レジデンスを務める。今回が初来日。

5/31 土曜マチネー
6/1 日曜マチネー
Artist

先進的な研究者気質と芸術肌を併せ持つ俊英ピアニスト。東京芸術大学を経て、ハノーファー音楽演劇大学大学院ソリスト課程に在籍。フランツ・リスト国際コンクール第1位、エリザベート王妃国際音楽コンクール第4位、ヴァン・クライバーン国際コンクールに19歳で最年少入賞など数々のコンクールで入賞・受賞。国内はもとより世界各地で演奏を重ね、国際音楽祭にも出演を重ねる。15年CDデビュー、20年には世界初録音を含む意欲的な編曲作品アルバムをリリース。作曲家・編曲家としても活躍し、テレビ・ラジオなどへの出演も多い。横浜文化賞文化・芸術奨励賞、出光音楽賞、神奈川文化賞未来賞、ベストデビュタント賞を受賞。読響とは19年、22年、24年に共演。今年3月には《読響アンサンブル・シリーズ》に出演し、好評を博した。

©Ayustet

ピアノ

阪田知樹

TOMOKI SAKATA, Piano

ドヴォルザーク
チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

交響曲第９番〈新世界から〉と並ぶアントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）の代表作。ボヘミア出身のドヴォルザークは1880年代にはヨーロッパを代表する作曲家の一人となり、その名声は米国にも達した。ニューヨークのナショナル音楽院に招聘され、1892年から95年まで院長を務める。この米国時代に〈新世界から〉、弦楽四重奏曲〈アメリカ〉、そして本作が書かれた。友人で名チェリストのハヌシュ・ヴィハーン（1855〜1920）の助言を得ながら作品を仕上げた。チェロの特質を生かした独奏パート、緻密なオーケストレーション、全曲に溢（あふ）れる魅力的な旋律に、恩人のヨハネス・ブラームス（1833〜97）が、「チェロにこのようなことができるとわかっていれば、自分が作曲したであろうに」と感嘆したと言われる。ヴィハーンに献呈されたが、初演はドイツ系英国人チェリスト、レオ・スターン（1862〜1904）の独奏、作曲者自身の指揮でロンドンで行われた。

第1楽章　アレグロ　ソナタ形式　クラリネットが第1主題をささやき、独奏ホルンがノスタルジーに満ちた第2主題を奏する。これらの主題がチェロと巧みな管弦楽で多彩に展開される。

第2楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ　三部形式　ボヘミアの森の静謐（せいひつ）さと、爆発するような感情の高まりが綾（あや）なす緩徐（かんじょ）楽章。自作の歌曲〈私をひとりにして〉の旋律が用いられ、初恋の女性の死を悼む思いが込められている。

第3楽章　アレグロ・モデラート　自由なロンド形式　低弦が刻む行進曲調に始まり、ホルンが主題の前半に基づくモティーフを奏する。続くトゥッティではトライアングルが打ち鳴らされ、独奏チェロが決然と力強い主題を弾き始め、二つの副主題と絡みながら進む。独奏ヴァイオリンと独奏チェロの印象的な掛け合いを経て、コーダでは独奏チェロが名残り惜し気に音を引き延ばす中、突然管弦楽が湧きあがり、主題の前半を再現し、輝かしく結ばれる。

〈等松春夫 英国音楽研究者〉

作曲：1894〜95年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

エルガー
創作主題による変奏曲〈エニグマ〉

「管弦楽のための創作主題による変奏曲〈エニグマ〉」（以下〈エニグマ変奏曲〉）はエドワード・エルガー（1857〜1934）の出世作であり、代表作の一つである。英国にはヘンリー・パーセル（1659〜95）以後、国際的に評価される作曲家がおらず、そのような中で現れたのがエルガーであった。交響曲、管弦楽曲、オラトリオで大作を書き、チェロ協奏曲とヴァイオリン協奏曲も名曲として知られる。1899年、ハプスブルク帝国出身の巨匠指揮者ハンス・リヒター（1843〜1916）の指揮で行われた〈エニグマ変奏曲〉初演は大成功に終わり、エルガーを一躍、国民的作曲家の地位に押し上げた。ニキシュ、マーラー、トスカニーニ、モントゥー、ストコフスキーら錚々（そうそう）たる巨匠たちがレパートリーに加えている。

この曲では、エルガーの妻と友人たちが主題と14の変奏で描かれている。エルガーが「この曲には小さな謎と、演奏されない隠された主題がある」と語ったことから、「謎＝エニグマ」の変奏曲と呼ばれる。小さな謎とは、各変奏に記されたイニシャルやニックネームで、第13変奏を除いて、すべて判明している。しかし、「隠された主題」については、「きらきら星」「蛍の光」「ルール・ブリタニア」「モーツァルトの交響曲」など、さまざまな候補が論じられてきたが、いまだに結論が出ていない。

主題提示〜第1変奏〈C.A.E.〉まず、創作主題がト短調で静々と提示される。憂いと優しさが混ざった第1変奏は、愛妻のキャロライン・アリス・エルガー。エルガーが即興で弾いたピアノのモティーフをアリスが褒（ほ）めたことがきっかけで、創作主題に発展した。**第2変奏〈H.D.S-P.〉**は 室内楽の仲間で、ピアノを担当するヒュー・デイヴィッド・ステュワート・パウエル。ヴァイオリンによる16分音符の細かい動きは、ピアノ演奏前の指慣らしを模したもの。**第3変奏〈R.B.T.〉**はアマチュア劇団で老人役を演じるリチャード・バクスター・タウンゼント。ファゴットは彼の低い声。**第4変奏〈W.M.B.〉**では、精力的な田舎紳士ウィリアム・ミース・ベイカーがバタン、とドアを閉めて出ていく。深刻そうに始まる**第5変奏〈R.P.A.〉**では、思慮深いインテリ、リチャード・ペンローズ・アーノルドが、真面目な会話の合間に、ふとユーモラスな話題を差し挟む。**第6変奏〈Ysobel〉**のイゾベル・フィットンはアマチュアのヴィオラ奏者。**第7変奏〈Troyte〉**は建築家アーサー・トロイト・グリフィス。常に物差しを携帯し、古い建物を見つけるとサイズを測り始める。**第8変奏〈W.N.〉**のウィニフレッド・ノーブリーは18世紀に建てられた典雅な家に住む婦人で、地元の音楽協会の事務局に務めている。単独でもしばしば演奏される**第9変奏〈Nimrod〉**はエルガーの親友、オーギュスト・イェーガーのニックネーム。帰化ドイツ人でノヴェロ音楽出版の社員であった。荘重な調べはイェーガーが愛好していたベートーヴェンのピアノ・ソナタ〈悲愴〉の緩徐楽章が下敷きになっている。可憐な**第10変奏・間奏曲〈Dorabella〉**はエルガー夫妻が可愛（かわい）がっていた牧師の娘、ドーラ・ペニー。彼女の愛称はモーツァルトのオペラ〈コジ・ファン・トゥッテ〉の登場人物に由来する。**第11変奏〈G.R.S.〉**では友人のオルガニスト、ジョージ・ロバートソン・シンクレアの愛犬、ブルドッグのダンが川に落ちて、必死に犬かきをする。**第12変奏〈B.G.N.〉**のベイジル・G・ネヴィンソンは深々とした音色でチェロを奏する。**第13変奏・ロマンツァ**にはイニシャルではなく、**〈***〉**が記されている。これはオーストラリアへ旅立った貴族令嬢レディ・メアリー・ライゴンと考えられてきたが、近年ではニュージーランドに移住した初恋の女性ヘレン・ウィーバーという説が有力。ティンパニのトレモロが客船のエンジン音を模し、メンデルスゾーンの序曲〈静かな海と楽しい航海〉の旋律がクラリネットで引用されて、船旅を示唆（しさ）する。**終曲・第14変奏〈E.D.U.〉**では長い雌伏の時代を経て世に出ようとする得意満面のエルガーの姿が浮かび上がる。「エドゥ」とは、アリス夫人が夫を呼んでいた愛称。途中で〈C.A.E.〉と〈Nimrod〉が回想され、アリス夫人とイェーガーへの感謝が示される。コーダでは〈E.D.U.〉が力強く繰り返された後、創作主題の前半がト長調に転じてトゥッティで奏され、威風堂々と締めくくられる。

〈等松春夫 英国音楽研究者〉

作曲：1898〜99年／初演：1899年6月19日、ロンドン／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル）、弦五部

尾高尚忠
交響的幻想曲〈草原〉

戦中戦後の混乱期に作曲家兼指揮者として日本の楽壇を支えながら、過労のため若くして世を去った尾高尚忠（1911〜51）。時代の裂け目に忘れ去られた幻の作品を、尚忠の次男である尾高忠明が、戦後80年にあたり初めて取り上げる。

二度にわたってウィーンに留学した尾高尚忠は、フローラン・シュミットやレスピーギなど同時代の音楽に魅せられる一方、留学時代の仲間でのちにN響事務長となる有馬大五郎から、「日本的なものと西洋音楽の融合」という命題を与えられる。

戦時下の総動員体制の中で、作曲家たちは時局の要請に従いつつ自らの芸術的良心を表出するという困難に挑んだが、尾高は「日本の生命線」と言われた満蒙（満洲と内蒙古、現在の中国東北部と内モンゴル自治区）を巧みに主題としながら、生々しい現実ではなく、悠久の歴史と人智を超えた大自然に思いを馳（は）せることで、日本人による西洋音楽の語法を切り拓（ひら）こうとした。本作品の内容については、尾高尚忠がスコア冒頭に自ら記した文章に委ねたい。

「曲は蒙古草原、いわゆるステップ地帯を主題とする幻想的交響詩である。

この大東亜共栄圏の一角に、巨大な地域を占めて広漠と拡がる原野は、時代の推移をよそに、静寂のうちに悠久の詩を歌っている。

やがて、はるかなる地平線の空を黄褐色に染めて、巨大な土煙が荒野を霞めはじめる。それは、はるかの昔における雄大な民族的大移動の姿を想い浮ばしめる。

ひとたび時を得、機に臨むや、彼ら遊牧民族の祖先は、それまでの平和な姿を捨て、団結して一大軍隊となり、行く手に横たわるあらゆるものを乗り越え、その移動を完遂した。

やがて彼らは黄塵を残してこの果てしなき草原を彼方へと去ってゆく。草原は再び「静」の姿に還り、鈍い銀色の空の下に、悠久の姿を取り戻す。」（抜粋）

1943年6月26日に完成し、翌44年5月4日に国内向け放送で初演されたのち、同月7日に日比谷公会堂で公開初演された。　〈岩野裕一 音楽評論家〉

作曲：1943年／初演：1944年5月4日（国内向け放送にて）／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、シロフォン、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、弦五部

ブルックナー
交響曲 第９番 ニ短調 WAB109（コールス校訂版）

郷里のオーストリア・リンツで教会のオルガン奏者を続けながら作曲を学んでいたアントン・ブルックナー（1824〜96）が、のちに〈00番〉と呼ばれる最初の交響曲を書き上げたのは1863年5月のこと。すでに40歳を目前にしていたが、同年2月にワーグナーの〈タンホイザー〉を聴いた衝撃を原動力に次々と交響曲に取り組み、96年に72歳で亡くなるまで11曲もの交響曲を作曲した。

だが、その斬新な響きは当時の聴衆や評論家、演奏者から受け入れられず、オルガニストとしては名声を博したものの、作曲家としてはなかなか認められなかった。自作に自信が持てなかったブルックナーは完成した交響曲を次々に改訂したばかりか、出版に際し弟子が勝手に修正したため、同曲異種が数多く存在する。

1884年の初演が大成功を収めた〈第７番〉に続き、自信をもって書き上げた〈第８番〉の初稿が87年９月に完成、引き続き〈第９番〉に着手したブルックナーを待っていたのは、友人だった指揮者ヘルマン・レヴィの〈第８番〉に対する酷評だった。一気に自信を喪失したブルックナーは、〈第９番〉の作曲を中断して〈第８〉の改訂に取り掛かり、改訂の筆は〈第４〉〈第３〉〈第１〉にまで及ぶ。そのため〈第９〉の作曲ははかどらず、ようやく91年から本格的に着手するものの、第３楽章までが完成を見たのは94年11月のことだった。ブルックナーはその後も第４楽章の推敲を重ね、多数の草稿やスケッチが残されたが、ついに完成の日を迎えることなく、96年10月に死去する。

未完を予期したブルックナーは生前、「フィナーレの代わりに自作の〈テ・デウム〉を演奏してもよい」と語ったという。これは、同じニ短調という調性を持つベートーヴェンの〈第９〉を意識したものだが、残された断片をもとに第４楽章の復元に挑む音楽学者も多く存在する一方で、緩-急-緩のシンメトリーを形成した３楽章形式の交響曲として完結しており、補完は不要、との意見も根強い。

〈第９番〉には、1903年に初演したフェルディナント・レーヴェが原典を大幅に修正したレーヴェ版のほか、より原典に近いものとして、国際ブルックナー協会から1934年にオーレル版、51年にノヴァーク版が出版されているが、両者のあいだに大きな差異はない。本日演奏されるコールス版は、ドイツの指揮者で音楽学者でもあったベンヤミン=グンナー・コールス（1965〜2023）が、ウィーンで新たに発見された筆写譜などを再検討して2000年に出版したもので、ノヴァーク版とはおよそ30か所の差異があるといわれる。

日本では、1936年にクラウス・プリングスハイムが東京音楽学校（現東京芸大）管弦楽団と初演したのち、1950年12月に日本交響楽団（現Ｎ響）で尾高尚忠が取り上げた。その２か月後に急逝した尚忠が、日響との最後の定期演奏会で指揮した作品だけに、尾高忠明にとっては深い思いを込めた、大切なレパートリーとなっている。

第１楽章　荘重に、神秘的に　ニ短調　２分の２拍子　ソナタ形式

虚無的なＤの基音に始まり、最後の審判を思わせる全合奏の荘厳な第１主題と、ヴァイオリンによる歌謡的な第２主題、そして寂寥感を感じさせるオーボエの第３主題と弦によるその転回形が複雑に絡み合い、聴く者を圧倒する長大な楽章。

第２楽章　スケルツォ　快速に、生き生きと　ニ短調　４分の３拍子

スケルツォの主部では、宇宙が振動するような荒々しさと、ユーモラスな諧謔さが同居する。トリオは主部より早めのテンポ設定がなされた異色のもの。

第３楽章　アダージョ　ゆっくりと、荘重に　ホ長調　４分の４拍子

神と音楽への信仰が生んだ、感動的な現世への告別と浄化の音楽。前触れなく冒頭にヴァイオリンで奏される主題は、20世紀音楽のさきがけというべき大胆な和声からなり、世の終わりのようなカタストロフを経て、コーダでは〈第８〉の第３楽章と〈第７〉の冒頭の主題が回想され、永遠へと続く響きの中で曲を閉じる。

〈岩野裕一 音楽評論家〉

作曲：1887〜96年／初演：1903年２月11日、ウィーン／演奏時間：約63分
楽器編成／フルート３、オーボエ３、クラリネット３、ファゴット３、ホルン８（ワーグナーチューバ持替４）、トランペット３、トロンボーン３、チューバ、ティンパニ、弦五部

ガーシュイン
パリのアメリカ人

「狂乱の時代」と呼ばれた1920年代のパリは多くの作家や芸術家を惹(ひ)きつけた。ヘミングウェイ、フィッツジェラルド、ジェイムズ・ジョイス、ピカソ、サルバドール・ダリ……。ヘミングウェイが『移動祝祭日』で描いた時代だ。

ジョージ・ガーシュイン（1898〜1937）も兄妹たちとともに、この街を訪れた。1928年3月、ガーシュイン家の一行はパリに到着して、ヨーロッパに3か月にわたって滞在する。ガーシュインはラヴェルやストラヴィンスキー、プーランクら、ヨーロッパの名だたる作曲家たちと面会した。ラヴェルとは先だってニューヨークでも会っている。その際、ガーシュインがラヴェルにオーケストレーションの技法について弟子入りを志願したところ、「君はすでに一流のガーシュインなのだから、二流のラヴェルになることはない」と断られたという有名な逸話がある。この「名言」はいくらか誇張を含んで定着したもののようだが、ふたりの間にそのような趣旨の会話があったことをパーティーの同席者が伝えている。

パリ滞在中のガーシュインはホテルを訪れた訪問客たち、レオポルド・ストコフスキーやヴァーノン・デュークらに、パリをテーマにした新作に使う「ホームシックを表現したブルース」を弾いて聴かせたという。6月にニューヨークに戻ると、ガーシュインは〈パリのアメリカ人〉の作曲を進める。オーケストレーションにはパリから持ち帰ったタクシーのクラクションが活用された。

曲は描写的だ。春の朝、アメリカからの旅行者はシャンゼリゼ通りを意気揚々と歩く。タクシーのクラクションが「プププッ！」と音を発して、都会の喧騒を伝える。当時の流行歌、陽気な〈ラ・マシーシュ〉が引用される。やがてスロー・ブルースが奏でられ、旅人はホームシックに襲われる。だが、チャールストンが威勢よく演奏されると元気を取り戻し、ふたたびパリの街を歩きだす。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1928年／初演：1928年12月13日、ニューヨーク／演奏時間：約16分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、アルトサクソフォン、テナーサクソフォン、バリトンサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、トムトム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、シロフォン、ウッドブロック、クラクション）、チェレスタ、弦五部

ラヴェル
左手のためのピアノ協奏曲 ニ長調

パウル・ヴィトゲンシュタインというウィーン出身のピアニストがいた。父親は鉄鋼王カール・ヴィトゲンシュタイン。弟は哲学者のルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン。恵まれた家庭環境のもと、パウル・ヴィトゲンシュタインはブラームスやマーラーらと交流し、ピアニストへの道を歩む。しかし、第一次世界大戦に召集されると、戦地で被弾し、右腕の切断を余儀なくされる。ロシアでの捕虜生活から帰還したヴィトゲンシュタインは、左手のみによる演奏活動に挑んだ。

だが、左手で演奏できる作品など限られている。そこで、ヴィトゲンシュタインは並外れた財力を使って、著名な作曲家たちに左手で演奏可能なピアノ協奏曲を次々と委嘱した。ブリテン、プロコフィエフらもこれに応えたが、最大の成果はモーリス・ラヴェル（1875〜1937）の左手のためのピアノ協奏曲。ヴィトゲンシュタインによる5年間の独占上演権が切れると、ほかのピアニストたちも関心を寄せた。名ピアニスト、アルフレッド・コルトーは両手用に編曲したいと願い出たが、断られてしまう。編曲の必要などなかったのだろう。現在では多くの両手のピアニストたちが、左手で本作品を弾いている。

曲は切れ目のない「緩−急−緩」の3つの部分からなる。ラヴェルは作品を「混じりあったミューズたち」と形容し、さまざまな音楽が渾然(こんぜん)一体となっていることを示唆した。**第1部**はうごめくような低音で開始され、管弦楽が頂点に達すると、独奏ピアノが力強いカデンツァを奏でる。フランス風序曲を思わせる荘重な管弦楽に対し、独奏ピアノは情感豊かで、ときに物憂げでもある。**第2部**は行進曲調。ジャズの語法が用いられ、上機嫌でユーモラス。**第3部**では第1部の主題が回帰する。独奏ピアノの長大なカデンツァを経て、勇壮な終結部を迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1929〜30年／初演：1932年1月5日、ウィーン／演奏時間：約19分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、ウッドブロック、銅鑼）、ハープ、弦五部、独奏ピアノ

ドヴォルザーク
交響曲 第９番 ホ短調 作品95〈新世界から〉

「新世界」とはアメリカのこと。チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）にとって、アメリカははるか彼方（かなた）の異国である。ジェット機が飛び交う現代とは異なり、19世紀末にヨーロッパからアメリカに渡るためには船による長旅が必要だった。この曲は、はるばるたどり着いた新世界から故郷に向けた一種の音の便りとでも言えるだろう。

ドヴォルザークがアメリカに渡ったのは、ニューヨークに設立されたナショナル音楽院の院長に就任するためだった。1891年、裕福な実業家の夫を持つジャネット・サーバーは、本格的な音楽院をアメリカに設立すべく、すでに国際的な名声を築いていたドヴォルザークに院長への就任を依頼した。当初、ドヴォルザークはこのオファーを断っていたが、サーバー夫人からの粘り強い説得と桁外れの高額報酬に心を動かされ、渡米を受諾する。ドヴォルザークはアメリカの黒人霊歌や先住民の音楽から新たな刺激を受け、新世界で受けたインスピレーションと祖国への望郷の念を交響曲第９番〈新世界から〉へと結実させた。

第1楽章　アダージョ〜アレグロ・モルト　ゆったりとした序奏から、緊迫感みなぎる主部へと続く。勇ましく推進力あふれる楽想がくりひろげられる。

第2楽章　ラルゴ　イングリッシュ・ホルンによる郷愁を誘うメロディは「遠き山に日は落ちて」あるいは「家路」の題で広く親しまれている。

第3楽章　モルト・ヴィヴァーチェ　エネルギッシュな民俗舞曲風のスケルツォ。中間部はひなびた民謡風。

第4楽章　アレグロ・コン・フオーコ　あたかも機関車が徐々に速度をあげて爆走するかのような開始部は、大の鉄道ファンだった作曲者ならでは。壮大なクライマックスを築くが、消え入るような最後の一音が余韻を残す。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、弦五部